

スコットランドにおけるマルチ・レベル状況の進行： 2011年スコットランド地域議会選挙調査から(1)*

成 廣 孝[†]

はじめに

第四回スコットランド地域議会選挙は、2011年5月5日にイギリス（連合王国）全土における AV レファレンダム⁽¹⁾と同時に実施された。権限委譲決定後初めての地域議会選挙となった1999年から数えて四度目の選挙である。筆者は既に前回の2007年選挙までについて異なる主題で分析を行っているが（成廣2007, 2010）、2007年選挙は地域政党であるスコットランド国民党（以下 SNP と表記）が初めて単独少数派政権を奪取した画期的選挙であった。さらに、今回 SNP が勝利した場合には、ウェストミンスター政府との合意で2014年、スコットランドの連合王国からの独立を問うレファレンダムが実施されることになっていた。SNP 党首であり、2007以降首席大臣を務めるアレックス・サモンド（Alex Salmond）にとり、独立は最大の悲願である（Torrance 2010 ; Hassan 2009 ; Lynch 2013 ; Bowers 2013）。キャメロン保守自由民主連立政権首相が推進しようとしている EU 離脱を問うレファレンダムとともに、短期的視点で見れば（現時点で予想される結果を考えれば）、EU および連合王国の枠組みをすぐさま大きく変える出来事ではないように

四
八

*この研究は科研費「ナショナル・アイデンティティの変容が選挙政治にもたらす影響に関する研究」（研究課題番号：23730139）の成果である。

[†] narihiro@law.okayama-u.ac.jp

(1) AV レファレンダムについての分析は富崎（2013）、連立政権の政治過程については成廣（2014b）を参照。

も思われるが、大きな枠組み自体について国民的議論が喚起され、政党や政治家達、多数の NPO, NGO 団体がキャンペーンを行うとなれば、中長期的に人々の意識を変化させる可能性を秘めた出来事にもなりうる。権限委譲も1979年に一敗地に塗れて20年後に実現されていることを考えれば、後から振り返ってみて、実はこれが重要な転換点だったということにならないとも限るまい。

近年のヨーロッパ諸国においては、EU 統合が深化していく一方で、国内的には権限移譲が進められ、以前は国民国家の中央政府に集中していた権力・権限が第三セクターや市場、国際機関に拡散されている。こうした現象は「マルチ・レベル・ガバナンス」と呼ばれているが、おおまかな事実の描写として有用であるとは思われるが、具体的な制度や政治的アクター、たとえば政党や有権者の変化についての検討はまだ発展途上にあるように思われる(成廣2010)。本稿はスコットランドを例にとったその試みのひとつである。

使用するデータについて

本稿は、2011年スコットランド地域議会選挙に関するサーヴェイ・データを用いて、スコットランドにおけるマルチ・レベル状況の進行を検討するものである。主に使用するデータは、ストラスクライド大学の The Centre for Elections and Representation Studies in the School of Government and Public Policy が The Economic and Social Research Council (ESRC) の資金援助を受けて行った、2011年スコットランド地域議会選挙に関する2波のインターネット・パネル・サーヴェイ Scottish Election Study 2011 (直接の実施は世論調査会社 You Gov) である。回答者の中には2007年のスコットランド議会選挙サーヴェイに回答した者が含まれており、一応経年比較も可能となっている。また、2010年総選挙に関する質問など、UK とスコットランドの関係についての意識を問う質問項目が含まれており、当報告の目的に合致している。総データ数は2,046である。

1 2011年スコットランド地域議会選挙結果

まず、選挙結果から確認しよう⁽²⁾。

この選挙で SNP は初めて単独過半数議席を獲得した(表1)。追加メンバーシステム (AMS) は大政党に若干有利とはいえ、リージョン票からドント式で議席を配分し、そこから選挙区で各政党が獲得した議席数を控除する(残りが上乗せ議席) ことで結果を比例的に修正する選挙制度である(成廣 2014a)。主席大臣サモンドが独立レファレンダム実施を公言しているこの結果であり、サモンドは(結果まではともかく)レファレンダムの実施にお墨付きをもらったことになる。選挙区票と上乗せ票の配分に大きな変動が発生しており、SNP が選挙区で最大のライバル労働党を凌駕したことを示している。SNP が労働党から多くの選挙区議席を奪ったことで、その有力政治家が選挙区議席を失ったことも大きい。労働党がウェストミンスターの政権を失ったばかりであることを勘案しても大きな進歩である。自由民主党も多くの選挙区議席を失い、上乗せでの回復もならなかった。自由民主党の選挙区を

表1 スコットランド議会選挙結果 (2007, 2011)

2007	選挙区得票	選挙区議席	名簿得票率	上乗せ議席	合計	議席率	
労働党	32.2	37	29.2	9	46	35.7	
SNP	32.9	21	31.0	26	47	36.4	
保守党	16.6	4	13.9	13	17	13.2	
自由民主党	16.2	11	11.3	5	16	12.4	
緑	0.2	0	4.0	2	2	1.6	
その他	1.9	0	10.6	1	1	0.8	
2011	選挙区得票	選挙区議席	名簿得票率	上乗せ議席	合計	議席率	議席増減
労働党	31.7	15	26.3	22	37	28.7	-9
SNP	45.4	53	44.0	16	69	53.5	+22
保守党	13.9	3	12.4	12	15	11.6	-2
自由民主党	7.9	2	5.2	3	5	3.8	-11
緑			4.4	2	2	1.6	±0
その他	1.1	0	7.86	1	1	0.8	±0

(2) 選挙結果については、下院リサーチ・ペーパー (Sandford 2011) を参照。選挙制度については成廣 (2007) を参照のこと。

表2 議会選挙への関心

	2011年スコットランド		2010UK選挙	
	N	%	N	%
Very interested	961	47.11	849	41.70
Fairly interested	712	34.90	752	36.94
Not very interested	225	11.03	269	13.21
Not at all interested	142	6.96	166	8.1
合計	2,040	100	2,036	100

Source: /Users/tigerhorse/Dropbox/scotland/SES 2011/SES prepost 2011.dta⁽³⁾

奪ったのもやはり SNP である。スコットランドの AMS のリージョン部分は比例配分され、阻止条項もないので小政党には不利にならないが、後述するように自由民主党支持者の投票がある程度他の政党にむかっており、短期的な、特に連立政権内でのパフォーマンスが影響を及ぼしていると考えられよう。

この選挙への関心は高く、2010年総選挙への関心を上回った（表2の度数分布表）。ただし、投票率は2010年総選挙の65%を下回る50.3%（リージョン票）であった。2007年から0.4%の微減となる。直近で行われた各種選挙と比較すると、総選挙と2011年地方選挙（40%程度）の中間程度となる。投票を決定するにあたって、スコットランドの事情を主な基準に考えたか、あるいはイギリス全体のことを考えたか（表3）、では、スコットランドの事情を優先する者が倍以上となっている。投票支持との関連性をみるため、カイ二乗検定を行い、有意なセルについては調整済み残差を太字にしている。SNP および支持無し層でスコットランド優先、二大政党支持者はイギリス全体の事情を重視する傾向がみられる。

これが政党支持と実際のリージョン（リスト）票⁽⁴⁾の投票先との分割表である（表4）。SNP・保守党・労働党の歩留まりは高く、政党支持がほとんど

(3) 以下、言及がない限り図表は筆者作成。

(4) スコットランド議会選挙で採用されている追加議員システム（AMS）では（小）選挙区票と、地域内で名簿からドント式比例代表によって上乗せ議員を決めるリージョン票の2票が投じられる。小政党の当選可能性など特性が異なるため、それぞれ検討が必要になる。

表3 政党支持と何を基準に投票を決めたか (独立性の検定)

	何を基準に投票を決めたか			Total
	スコットランド	イギリス全体	その他	
Labour	244	144	20	408
(期待値)	284.403	99.648	23.950	
(修正済み残差)	-4.909	5.764	-938	
Conservative	86	80	14	180
	125.472	43.962	10.566	
	-6.728	6.570	1.144	
Liberal Democrat	49	20	6	75
	52.280	18.318	4.403	
	-.841	.461	.801	
SNP	332	42	16	390
	271.855	95.252	22.893	
	7.430	-7.036	-1.665	
支持無し	619	180	56	855
	595.991	208.821	50.189	
	2.305	-3.088	1.13.6978	
	69.71%	24.42%	5.87%	
Total	1,330	466	112	1,908

Pearson chi2(8) = 120.838 Pr = .000

likelihood-ratio chi2(8) = 121.796 Pr = .000

Source: /Users/tigerhorse/Dropbox/scotland/SES 2011/SES prepost 2011.dta

表4 政党支持と実際の投票 (リスト) (%)

政党支持	リストでの投票先								
	保守党	労働党	自由民主党	SNP	緑	SSP	UKIP	その他	合計
労働党	0.65	75.48	1.29	11.61	6.77	1.29	0.65	2.26	100.00
保守党	81.38	2.07	0.69	12.41	0.00	0.00	2.76	0.69	100.00
自由民主党	1.69	3.39	52.54	18.64	16.95	1.69	0.00	5.08	100.00
SNP	0.97	0.32	0.32	91.61	1.29	3.55	0.00	1.94	100.00
支持無し	8.55	14.64	6.25	45.39	10.69	2.14	4.11	8.22	100.00
合計	12.29	22.97	5.24	43.65	6.98	2.03	2.16	4.68	100.00

Source: /Users/tigerhorse/Dropbox/scotland/SES 2011/SES prepost 2011.dta

表5 政党支持と実際の投票（選挙区）（％）

政党支持	選挙区での投票先					
	保守党	労働党	自由民主党	SNP	その他	合計
労働党	0.00	81.29	2.58	15.48	0.65	100.00
保守党	76.55	2.76	4.14	16.55	0.00	100.00
自由民主党	3.39	6.78	61.02	25.42	3.39	100.00
SNP	0.32	0.64	0.32	97.75	0.96	100.00
支持無し	9.06	22.41	9.72	53.54	5.27	100.00
Total	11.80	27.79	7.68	50.00	2.72	100.00

Source: /Users/tigerhorse/Dropbox/scotland/SES 2011/SES prepost 2011.dta

表6 4月時の投票意図と実際の投票（リスト）（％）

投票意図	投票先（リスト）								
	保守党	労働党	自由民主党	SNP	緑	SSP	UKIP	その他	合計
保守党	83.43	3.31	2.21	7.73	0.00	0.00	2.21	1.10	100
労働党	0.00	87.39	0.90	6.61	3.60	0.30	0.30	0.90	100
自由民主党	6.76	4.05	67.57	16.22	2.70	1.35	0.00	1.35	100
SNP	1.27	1.27	0.90	90.78	1.81	2.89	0.18	0.90	100
緑	0.00	2.53	0.00	8.86	82.28	1.27	0.00	5.06	100
SSP	0.00	3.33	0.00	60.00	10.00	23.33	0.00	3.33	100
その他	4.95	6.93	2.97	13.86	1.98	0.99	24.75	43.56	100
Total	12.44	23.46	4.81	43.60	6.96	2.00	2.29	4.44	100

Source: /Users/tigerhorse/Dropbox/scotland/SES 2011/SES prepost 2011.dta

そのままりージョン票に変換されている。さらに、支持なし層は他と比べ緑やその他に多めに流れていることは明らかであるが、それでも半数近くが SNP に投票している。自由民主党の歩留まりは低めである（52.5%）。政党支持強度の弱さ、あるいは連立政権に対する評価の低さが影響しているのであろう。

表5は政党支持と実際の選挙区票の投票先との分割表である。こちらでも SNP を筆頭に、労働党・保守党の歩留まりは高く、政党支持がほとんどその

まま選挙区票に変換されている。ここでも、支持なし層は半数超が SNP に投票している。ここでも自由民主党の歩留まりは低い。それでも、これはリージョン票（上述）よりも高い。自然に考えるならば、中小政党では当選が難しい選挙区票のほうが実際の政党支持を取り下げて次善の政党に投票する（戦略投票）割合が高くなるのが正しいように思われるが、そうはなっていない。選挙区には勝ち目のない小政党の候補者が出馬しないため（それゆえ四政党以外の得票が少ない）、そもそも他に投票先がないことが原因であると考えられる。

表6はリージョン（リスト）票における選挙前（4月）の投票意図と実際の投票のクロス表である。SSP⁽⁵⁾や緑についても投票意図をもっているという回答者がそれなりにいたのでここに加えてある。SNP、労働党、保守党三党はだいたい一致しているが、自由民主党は1/3が他所の政党への投票に流れており、その半分が SNP 票となった。

2 AV レファレンダム：選挙制度について

実際のところ選挙制度改革が実現することはなかったものの、2010年総選挙の結果として実現の運びとなった保守自由民主連立政権の一つの目玉であり試金石ともなった AV レファレンダムは、権限委譲以来のマルチ・レヴェル化がどのように作用するかという点で興味深いケースだったといえる。権限委譲によって設置された地域議会はそれぞれ下院の FPTP とは異なる選挙制度を採用している（成廣2007）。1999年の最初の選挙から早くも四回の選挙を経験したスコットランド有権者は FPTP の改正により好意的に反応するのか。それとも、自分たちが慣れ親しんだ選挙制度に近づけるよりも、自らの支持政党の利益をはかろうとするのか。

表7は AV レファレンダムへの関心に関する質問への回答である。2010年

(5) Scottish Socialist Party. 以下略称にて表記する。

表7 AV レファレンダムへの関心

	N	割合
Very interested	656	32.06
Fairly interested	705	34.46
Not very interested	377	18.43
Not at all interested	244	11.93
DK	64	3.13
Total	2,046	100

Source: /Users/tigerhorse/Dropbox/scotland/SES 2011/SES prepost 2011.dta

表8 レファレンダムに投票するとしたら（政党支持との関係）（％）

どのように投票しますか？	政党支持					合計
	Labour	Conservative	LD	SNP	支持なし	
Yes（パーセント）	32.37	8.11	76.62	43.77	33.58	34.62
（期待値）	143.347	64.056	26.661	136.076	326.859	
（修正済み残差）	-1.083	-7.955	7.899	4.246	-9.26	
No（パーセント）	54.35	82.16	11.69	43.51	39.41	46.15
	191.061	85.378	35.536	181.370	435.656	
	3.754	10.311	-6.185	-1.170	-5.703	
DK	11.35	5.41	7.79	10.94	17.37	13.41
NA	1.93	4.32	3.90	1.78	9.64	5.81
Total	100	100	100	100	100	100

Pearson chi2(12) = 246.400 Pr = .000

likelihood-ratio chi2(12) = 257.575 Pr = .000

Source: /Users/tigerhorse/Dropbox/scotland/SES 2011/SES prepost 2011.dta

UK 総選挙や2011年スコットランド地域議会選挙への関心と比べ劣り，関心が弱い割合が1/4を越える。

四一

表8は，同時に実施される予定のAVレファレンダムで，投票するとしたらどのように投票するか（賛成か反対）（*w1_re5*）と小政党支持を含まず支持政党なしを含む政党支持（*w1_pid3*）との関連をみた分割票である．ここでも独立性の検定を行い，有意なセルの修正済み残差を太字としている。

保守党支持者・労働党支持者で「反対」が強いが，労働党支持者はやや劣

る（賛成も有意に弱くない）。自由民主党支持者は党の方針通り「賛成」多数である。イギリス全土では小政党である SNP 支持者では賛成が多めだが、賛否の割合では半々でありさほど「賛成」が多いわけではない。政党支持なしでも「反対」が有意に少ないが、回答割合は大凡で半々となっている⁽⁶⁾。前者に関しては、いずれにせよ SNP はスコットランドの外では支持を得られる見込みはなく、現行の小選挙区制でスコットランドの議席を獲得できているおり、自らには地域議会もあることを考えるなら⁽⁷⁾、下院の選挙制度改革改革は特に求められる対象ではなく、スコットランド内における損得を見極めかねているのではないかと考えられる。また、政党支持なし層も、この選挙の実際の投票で SNP に投票していることが多いことを考えれば、SNP 支持層と同様にみてよいように思われる。

3 スコットランドにおける政策と政党支持

3.1 経済争点

「小さな政府」（‘cut tax, spend less’）を 0 から、「大きな政府」（‘more tax, spend more’）10 までの間で回答者自身、回答者が考える各政党の位置を位置づける項目について、その分布を図示したのが図 1⁽⁸⁾、平均および標準偏差を要約したのが表 10 である。平均をみると保守党が一番小さな政府指

表 9 小さな政府か大きな政府か

カテゴリ	N	平均	標準偏差
回答者自己位置	1,946	6.270	2.386
労働党位置	1,556	5.866	2.527
保守党位置	1,556	3.783	2.992
SNP位置	1,564	5.428	2.243

(6) そしてここには SNP に投票した者が多く含まれている。

(7) いわゆる「ウェスト・ロジアン問題」である。Hazell (2006) など。

(8) 一般的左右位置で考えれば左右逆転している。

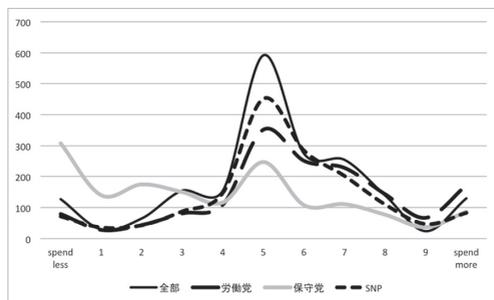


図1 小さな政府か大きな政府か：回答者と政党

表10 小さな政府か大きな政府か：政党支持ごと

カテゴリ	N	平均	標準偏差
労働党	400	7.078	2.342
保守党	180	5.017	2.471
SNP	384	6.651	2.182
支持無し	876	5.995	2.339

向であり、分布も左（小さな政府）に寄っている。労働党とSNPは平均も分布も大きな違いはないため、ダウンズ型投票を想定するならば同じような支持層を奪い合うことになる。一方で回答者自己位置はこれらより平均が大きな政府寄りであり、右側の分布が厚めである。

政党支持ごと（支持無しを含む）の自己位置の分布をみたのが図2である。保守党支持者は労働党・SNPよりも中道から大きな政府（本来の「左」）が薄い。ここでも労働党支持者とSNP支持者の左右分布はほぼ重なっており、同じような有権者がターゲットになっていることがわかる。左右の違いがないとすれば、ウェストミンスター政府とスコットランド政府の関係についての姿勢などが違うのかもしれない。政党支持無しは中道が厚いのが平均にも反映されている。

図3は、この問題に関する政党支持者の先行位置と、支持者が考える政党

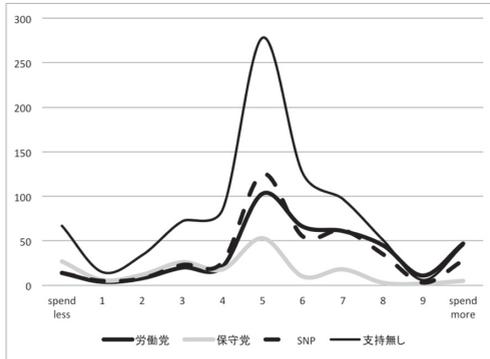


図2 小さな政府か大きな政府か：政党支持ごと

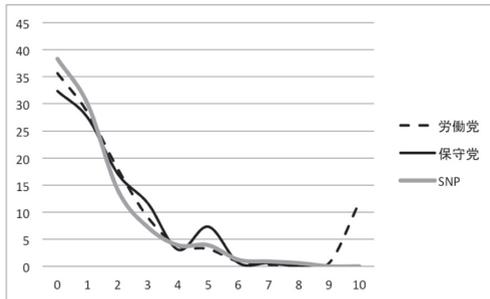


図3 小さな政府か大きな政府か：政党の政策との乖離

位置とのギャップ（絶対値）を示している。三党ともに両者に大きな差はない。労働党に限って政党支持を保持しながら、党の政策に大きな距離感（絶対値10）を感じている者が1割にのぼることが注目される。

金融危機の到来から連立政権の緊縮政策の採用という近年の展開は、イギリス国民に大きな影響を与えている。過去一年のスコットランド経済の動向については、7割が悪化したと述べており、好転したというのは1割強に過ぎない（表11）。ここでも支持政党毎の違いについて独立性の検定をおこなっている。SNP支持者では「大変悪くなった」は少なく、「やや良くなった」が有意に多い。傾向としては保守党支持者や自由民主党支持者もこれに似て

表11 過去一年のスコットランド経済について（支持政党ごと）

	過去一年のスコットランド経済一般についての評価					合計
	a lot worse	a little worse	Stayed	a little better	a lot better	
Labour	113	213	57	25	0	408
（期待値）	86.084	196.914	74.874	48.012	2.115	
（調整済み残差）	3.678	1.795	-2.574	-3.982	-1.642	
Conservative	39	71	40	33	0	183
	38.611	88.322	33.583	21.535	.949	
	.074	-2.693	1.288	2.765	-1.026	
自由民主党	4	40	15	15	0	74
	15.613	35.715	13.58	8.708	.384	
	-3.374	1.017	.435	2.315	-.633	
SNP	58	177	66	81	5	387
	81.653	186.779	71.02	45.541	2.006	
	-3.296	-1.113	-.737	6.257	2.37	
支持なし	193	430	176	73	5	877
	185.038	423.27	160.942	103.203	4.546	
	.892	.616	1.779	-4.286	.289	
割合	21.10	48.26	18.35	11.77	.52	
Total	407	931	354	227	10	1,929

Pearson chi2(16) = 103.590 Pr = .000

likelihood-ratio chi2(16) = 106.358 Pr = .000

Source: /Users/tigerhorse/Dropbox/scotland/SES 2011/SES prepost 2011.dta

いる⁽⁹⁾。「大変悪くなった」が多めの労働党支持者とは対照的である。同様の傾向は、今後一年のスコットランド経済の展望についても同様である（表12では独立性の検定⁽¹⁰⁾を行っている）。過去の回顧ほどネガティブではないが、将来をポジティブにみているのは1/5に過ぎない。そのなかでも、SNP支

三七

(9) 保守党得票率があまり変動しなかったことがこれによって説明できるかもしれない。それは言いすぎにしても、保守党・自由民主党支持者については、連立政権の状況にもかかわらず支持を表明していることの理由となるかも知れない（成廣2014b, Hazell 2012）。逆にいえば、ひどい状況でも経済状況が悪くないので支持を維持しているという解釈が可能である。

(10) 行変数ごとに列変数の平均を比較することも可能であるが、程度の解釈が若干難しいので、セル毎の傾向が容易なこの方法をとっている。

表12 今後一年のスコットランド経済一般についての展望

政党支持	今後一年のスコットランド経済一般はどのようになる？					合計
	a lot worse	a little worse	Stayed	a little better	a lot better	
Labour	86	176	93	41	2	398
	61.766	147.142	103.084	79.895	6.113	
	3.776	3.373	-1.299	-5.479	-1.887	
Conservative	28	58	45	48	1	180
	27.934	66.547	46.621	36.133	2.765	
	.014	-1.387	-.29	2.322	-1.125	
LD	3	26	21	23	0	73
	11.329	26.988	18.907	14.654	1.121	
	-2.746	-.244	.57	2.487	-1.088	
SNP	32	114	77	134	17	374
	58.041	138.269	96.868	75.077	5.745	
	-4.153	-2.903	-2.619	8.494	5.285	
支持無し	144	324	253	133	9	863
	133.93	319.054	223.521	173.24	13.256	
	1.285	.473	3.109	-4.641	-1.599	
	15.52	36.97	25.90	20.07	1.54	100
Total	293	698	489	379	29	1,888

Source: /Users/tigerhorse/Dropbox/scotland/SES 2011/SES prepost 2011.dta

Pearson chi2(16) = 160.050 Pr = .000

likelihood-ratio chi2(16) = 154.048 Pr = .000

持者は有意に将来に期待を持っていることが分かる⁽¹¹⁾。

この景況感は、支持者の社会階層と関係があるかもしれない。では、社会階層と政党支持とはどういう関係にあるのだろうか。社会階層と政党支持の関係をみたクロス表が表13である。結果からは保守党にAB層が多くDE層が少ないこと（調整済み残差の絶対値が1.96以上の有意なセルは太字としている）で辛うじて有意な連関があることがみてとれるが（p値も.029と、.05より若干小さいだけである）、それ以外には有意に多い/少ないセルがない。ス

(11) 問題は、SNPに多くの票を投じた支持無し層の将来展望があまり良くないことである。

表13 社会階層と政党支持

政党支持	AB	C1	C2	DE
Labour	79	108	99	128
	89.463	105.711	92.754	126.072
	-1.402	.289	.826	.231
保守党	60	51	32	42
	39.978	47.238	41.448	56.336
	3.753	.666	-1.748	-2.403
自由民主党	19	22	11	25
	16.639	19.661	17.251	23.448
	.667	.623	-1.742	.392
SNP	84	102	90	117
	84.925	100.349	88.049	119.677
	-.126	.213	.263	-.327
支持無し	193	231	219	301
	203.994	241.041	211.497	287.467
	-1.193	-1.028	.804	1.313

Pearson chi2(12) = 22.889 Pr = .029

likelihood-ratio chi2(12) = 22.428 Pr = .033

Source: /Users/tigerhorse/Dropbox/scotland/SES 2011/SES prepost 2011.dta

表14 ウェストミンスター、スコットランド両政府の影響

	ウェストミンスター		スコットランド	
	N	%	N	%
非常に大きい	706	36.71	401	20.87
やや大きい	971	50.49	1,071	55.75
あまり大きくない	222	11.54	424	22.12
全くない	24	1.25	24	1.25
合計	1,923	100	1,921	100

Source: /Users/tigerhorse/Dropbox/scotland/SES 2011/SES prepost 2011.dta

表15 平均値の差の検定 (対応有り)

Paired t test	N	平均	標準誤差.	Std. Dev.
ウェストミンスター	1,897	1.770	.016	.694
スコットランド	1,897	2.036	.016	.694
差	1,897	-.266	.021	.925

t = -12.5259

Ho: mean(diff) = 0 d.f = 1896

Ha: mean(diff) > 0 Pr(T > t) = 1.0000

表16 金融危機からソヴリン・デット・クライシス、耐乏の責任は？

順位	労働党政権		連立政権		SNP		英金融		個人		国際金融	
1st	364	19.35	139	7.76	54	3.14	836	42.31	125	6.49	465	23.81
2nd	227	12.07	117	6.53	66	3.83	686	34.72	288	14.96	598	30.62
3rd	334	17.76	235	13.12	75	4.36	293	14.83	594	30.86	431	22.07
4th	488	25.94	353	19.71	162	9.41	105	5.31	490	25.45	270	13.82
5th	312	16.59	510	28.48	505	29.33	35	1.77	270	14.03	126	6.45
6th	156	8.29	437	24.4	860	49.94	21	1.06	158	8.21	63	3.23
合計点	6,899		4,875		3,310		10,024		6,734		8,628	

コットランドでは SNP と労働党には支持の階層差はほとんどないのである。

そして経済パフォーマンスについて、ウェストミンスター政府、スコットランド政府のいずれに責任があるのかを尋ねた 2 項目をまとめたのが表14である。統計的に有意な差があることを確認した (表15対応のある平均値の検定)。

金融危機から緊縮に至る展開は、スコットランドにも大きな影響を与えることになったが、その責任はいつこにあるとみなされているのか。ウェストミンスターの労働党政権 (～2010年)、連立政権 (2010年～)、英国の金融機関、所得を超えて借り進めた個人、国際金融の六つを責任の重い順番に並べた質問項目の結果を集計した (表16)。さらに、一位を 6 点、二位を 5 点、三位を 4 点、四位を 3 点、五位を 2 点、六位を 1 点として合計点を計算した。回答者によっては、単なる順序だけではなく特別にウェイトを掛けたほうがよいと考えていたと思われるうえ、1 順位差を 1 ポイント差とするのが適当

表17 金融危機からソヴリン・デット・クライシス、耐乏の責任は？（三政権比較）

労働党政府				
	労働党支持者	保守党支持者	SNP支持者	支持無し
合計点	913	905	1,519	3,158
N	368	181	377	855
合計/N	2.4810	5	4.029	3.694
連立政権				
	労働党支持者	保守党支持者	SNP支持者	支持無し
合計点	1,300	212	1,021	2,125
N	379	158	353	809
合計/N	3.4301	1.342	2.892	2.627
SNP政権				
	労働党支持者	保守党支持者	SNP支持者	支持無し
合計点	740	427	474	1,503
N	359	164	329	782
合計/N	2.061	2.604	1.441	1.922

かどうかという問題はあるが、一つの目安にはなるであろう。最も責任があると考えられているのは英国の金融機関、それに国際金融が続く。政党関係では、労働党、連立与党、SNPの順序となる。その次の表17は、三政府に対する三政党支持者それぞれの評価を比較したものである。支持者の数が異なるため、合計点を支持者数で序して平均をとった。保守党支持者・SNP支持者・支持無し層は労働党政権の罪を最も重く見ている。保守党支持者以外はSNP政権の責任は最も軽いと考えている。当然と言えば当然であるが、この点ではSNPは有利な立場にあり、労働党が不利な立場に置かれている。

金融危機以後、労働党政府から計画され、オズボーン財務省を中心に保守・自由民主連立政権下で急速に進められようとしていた歳出カットについての賛否が表18である。削減の必要性は認めるにしても規模が大きいとする者が全体の3/4に上る。次表表19は、政党支持ごとの平均値の比較を行うため、「もっと大幅に」を1から「削減不要」を6として、多重比較（scheffeの方法）を行っている。自由民主党支持と支持無しとの間を除いて、5%水準以

表18 UK 政府が進めようとしている歳出削減について

response	Freq.	Percent	Cum.
もっと大幅にすべき	87	4.56	4.56
もう少し削減すべき	163	8.54	13.1
適正	365	19.12	32.22
必要だが少し行き過ぎ	490	25.67	57.88
必要だが大分行き過ぎ	752	39.39	97.28
削減不要	52	2.72	100
Total	1,909	100	

表19 UK 政府が進めようとしている歳出カットについて（政党支持ごと）

政党支持	労働支持	保守支持	自由民主支持	SNP支持
保守支持	-1.747 .000***			
自由民主支持	-1.102 .000***	.646 .001**		
SNP支持	-.351 .000***	1.396 .000***	.750 .000***	
支持無し	-.631 .000***	1.116 .000***	.471 .015*	-.280 .002**

上段は平均値の差。下段はp値。* : $p < .05$ ** : $p < .01$ *** : $p < .001$

表20 歳出カットのスコットランドへの影響は？

	N	%
他地域よりも大きな削減	436	25.39
他地域と同水準	1,017	59.37
他地域よりも軽い削減	261	15.24
合計	1,713	100

Source: /Users/tigerhorse/Dropbox/scotland/SES 2011/SES prepost 2011. data

表21 歳出カットのスコットランドへの影響は？（政党支持ごと）

歳出カットのスコットランドへの影響は？（政党支持ごと）				
政党支持	他地域よりも大きな削減	他地域と同水準	他地域よりも軽い削減	合計
労働党	92	211	51	354
	89.655	211.224	53.121	
	.322	-.027	-.355	
保守党	10	103	58	171
	43.308	102.032	25.66	
	-6.179	.159	7.305	
LD	9	46	12	67
	16.969	39.977	10.054	
	-2.284	1.531	.679	
SNP	142	176	30	348
	88.135	207.644	52.221	
	7.453	-3.882	-3.744	
支持無し	174	470	102	746
	188.934	445.122	111.944	
	-1.684	2.487	-1.365	
合計	427	1,006	253	1,686

Pearson chi2(8) = 122.209 Pr = .000

likelihood-ratio chi2(8) = 120.604 Pr = .000

Source: /Users/tigerhorse/Dropbox/scotland/SES 2011/SES prepost 2011.dta

上で有意な差がみられる。労働党支持者（平均値4.513）が最も削減反対派を多く含み、SNP支持者（4.161）がそれに次ぐ。あとは支持無し（3.881）、自由民主党支持者（3.411）、最も削減支持なのが保守党支持者（2.765）である。連立パートナーとの間に結構大きな差がみてとれる。ここでは二大政党のうち労働党こそ歳出カット反対であるが、保守党とそれ以外の間に意識の差がみてとれる。スコットランドの削減幅に対する認識は表20、政党支持ごとの傾向を見たものが表21である（ここでも独立性の検定を行い、有意な差のあるセルを太字にしている）。労働党支持者はおおまかに全体の傾向に沿っており、半数は特に不公平感を持っていない。これに対し、保守党支持者は

スコットランドに有利に、SNP 支持者はスコットランドが不利に扱われていると感じている。スコットランドへの眼差しの違いは明白である。

3.2 経済以外の争点について

3.2.1 最重要争点

表22は、回答者がイギリス、スコットランドそれぞれにおいて重要と考えた争点⁽¹²⁾について、取り組むのに最適な政党を尋ねたものである。イギリスの問題については労働党、保守党が SNP を上回っており、スコットランドの問題については SNP が上回っているのがわかる。スコットランドの有権者は、この二つのレベルをある程度区別しており、イギリスの問題について SNP に過度に期待をかけていない。

3.2.2 医療サービス

医療サービスについては、2007年以降スコットランドでも特に問題にされてきたところである。改善をみたとの回答が35.37%、従前のままが39.90%

表22 最重要争点：どの政党が扱うのが最適か？

政党支持	イギリス		スコットランド	
	N	%	N	%
重要問題なし	10	.49	28	1.37
支持無し	299	14.61	241	11.7
労働党	436	21.31	357	17.45
保守党	336	16.42	143	6.99
自由民主党	47	2.30	42	2.05
SNP	308	15.05	698	34.12
緑	15	.73	10	.49
その他	67	3.27	43	2.10
DK	528	25.81	484	23.66
合計	2,046	100	2,046	100

Source: /Users/tigerhorse/Dropbox/scotland/SES 2011/SES prepost 2011.dta

(12) 重要争点の回答は自由記述で行われている。この回答はそれぞれ形式も異なるので、ここでは集計は行わない。

表23 2007年以来医療サービスは怎么样了か？（その責任）

主に～の政策の結果	2007年以来医療サービスは怎么样了か？					合計
	大きく改善	やや改善	変化無し	やや悪化	大きく悪化	
中央政府	4	14	79	84	34	215
（期待値）	16.324	64.538	79.217	38.47	16.451	
（調整済み残差）	-3.395	-8.046	-0.033	8.668	4.818	
スコットランド政府	114	422	245	74	39	894
	67.879	268.358	329.396	159.962	68.405	
	8.46	16.288	-8.501	-10.897	-5.375	
均しく両方	10	65	273	119	43	510
	38.723	153.09	187.911	91.254	39.023	
	-5.74	-10.173	9.337	3.832	.792	
その他の理由	1	9	29	27	14	80
	6.074	24.014	29.476	14.314	6.121	
	-2.194	-3.752	-.113	3.791	3.395	
%	7.73	30.56	37.51	18.21	7.19	100
Total	129	510	626	304	130	1,699

Pearson chi2(12) = 475.631 Pr = .000

likelihood-ratio chi2(12) = 495.650 Pr = .000

Source: /Users/tigerhorse/Dropbox/scotland/SES 2011/SES prepost 2011.dta

のため、現状維持以上と考えている者でほぼ3/4を占めるということになる。表23は、その帰責先とのクロス表であり、独立性の検定を行っている（有意に関連しているセルは、修正済み残差を太字で表示している）。半数以上がスコットランド政府の責任としており、それも「改善」のセルの度数が非常に高く、「悪化」の責任を帰せられているのは中央政府である。スコットランド政府は医療サービスというイギリス全体、さらにはいずれの先進工業諸国であれ非常にプライオリティの高い医療サービスについて大きな責任を担っていると判断されているということであり、また、それもポジティブな評価をうけているということの意味している。これは2007年から政権を担当していたSNPの評価を高めたことであろう。

表24 2007年以降の教育の質についての責任は？

主に～の政策の結果	2007年以降の教育の質の状況					合計
	かなり向上	やや向上	変わらず	やや低下	かなり低下	
ウェストミンスター	1	10	37	90	36	174
	6.016	36.687	60.753	49.664	20.88	
	-2.216	-5.281	-4.022	7.21	3.756	
スコットランド政府	46	268	246	181	91	832
	28.767	175.425	290.495	237.473	99.84	
	4.953	11.917	-4.901	-6.566	-1.428	
双方の政策	2	29	213	120	38	402
	13.9	84.761	140.359	114.74	48.24	
	-3.809	-7.994	8.911	.681	-1.843	
その他の理由	2	4	19	30	12	67
	2.317	14.127	23.393	19.123	8.04	
	-.217	-3.104	-1.152	3.011	1.524	
	3.46	21.85	34.92	28.54	12.00	100
Total	51	311	515	421	177	1,475

Pearson chi2(12) = 259.939 Pr = .000

likelihood-ratio chi2(12) = 271.692 Pr = .000

Source: /Users/tigerhorse/Dropbox/scotland/SES 2011/SES prepost 2011.dta

3.2.3 教育の質

教育の質についてはどうか。表24は2007年以降のスコットランドについての教育の質の評価といずれの政府の責任と考えるのかということのクロス表である。独立性の検定（有意差のあるセルを太字表記）を行っているが、強い連関がみられる。全体としては低下しているとの評価の方が10%程度大きい。かなり向上した、あるいはやや向上したと考える者のうち、スコットランド政府の政策の結果であると考えられる割合が高い。また、低下したと評価したなかにはウェストミンスター政府の政策の責任と考える割合が高くなっている。

3.2.4 生活の質

次に、2007年のスコットランドでの生活の質（QOL）の状況についてのク

表25 2007年以降の QOL についての責任は？

主に～の政策の結果	2007年以降のQOLの状況					合計
	かなり向上	やや向上	変わらず	やや低下	かなり低下	
ウェストミンスター	3	16	71	405	197	692
	9.606	93.752	164.451	288.557	135.634	
	-2.735	-11.006	-10.636	11.441	7.489	
スコットランド政府	18	172	121	67	37	415
	5.761	56.224	98.623	173.051	81.341	
	5.854	18.93	2.942	-12.036	-6.25	
双方の政策	4	46	202	208	97	557
	7.732	75.463	132.369	232.264	109.173	
	-1.626	-4.389	8.34	-2.509	-1.563	
その他の理由	0	10	34	71	22	137
	1.902	18.561	32.557	57.128	26.852	
	-1.445	-2.223	.301	2.501	-1.086	
	1.39	13.55	23.76	41.70	19.60	
割合	25	244	428	751	353	1,801

Pearson chi2(12) = 619.514 Pr = .000

likelihood-ratio chi2(12) = 592.304 Pr = .000

Source: /Users/tigerhorse/Dropbox/scotland/SES 2011/SES prepost 2011.dta

ロス表である（表25，独立性の検定を行っている）。全体的には「やや低下」が4割，「かなり低下」と合わせて6割強と，悪化の報告に偏っている。しかし，そのなかでもその原因をどこの政府の政策に求めるかという点では大きな差違が見られる。「向上」の原因をスコットランド政府の政策に求める意見が多いのに対し，「低下」の原因は圧倒的にウェストミンスター政府に求められているのである。

3.2.5 法と秩序

イングランド（あるいは連合王国全体）では，保守党の政策領域とされている法と秩序についてはどうだろうか。表26がこれにあたる（独立性の検定を行っている）。ここでもやや「低下」の評価を下すものが多い傾向にある。そして，その責任の多くはウェストミンスター政府に着せられて言えるので

表26 2007年以降のスコットランドの法と秩序

主に～の政策の結果	2007年以降のスコットランドの法と秩序の水準は					合計
	かなり向上	やや向上	変わらず	やや低下	かなり低下	
ウェストミンスター政府	2	17	45	89	31	184
	9.76	39.817	67.544	41.813	25.066	
	-2.707	-4.332	-3.657	8.804	1.353	
スコットランド	83	289	228	126	113	839
	44.504	181.556	307.987	190.659	114.294	
	8.435	12.813	-8.149	-7.577	-.185	
双方の政府	2	43	300	131	71	547
	29.015	118.368	200.797	124.303	74.516	
	-6.295	-9.559	10.748	.835	-.535	
その他の理由	1	10	36	31	11	89
	4.721	19.259	32.671	20.225	12.124	
	-1.809	-2.45	.753	2.802	-.357	
割合	5.30	21.64	36.71	22.72	12.62	100
Total	88	359	609	377	226	1,659

Pearson chi2(12) = 357.274 Pr = .000

likelihood-ratio chi2(12) = 368.993 Pr = .000

Source: /Users/tigerhorse/Dropbox/scotland/SES 2011/SES prepost 2011.dta

ある。全体としては1/4ほどに留まるが、「向上」と評価するもののがかなり高い割合が、それをスコットランド政府の政策のおかげと考えていることは、上記の三つと同様である。要するに、全般的に見てスコットランドの経済や暮らし向きなどは若干の悪化をみせていると判断されているのであるが、その責任は主に、2010年までのブラウン労働党政府にせよ、成立して1年たったキャメロン保守・自由民主連立政権にせよ、そこにはSNPが加わっていない、ウェストミンスター政府にあるとされているのである。そして、割合としては低いが、これらが向上したと評価されるとき、それはSNP単独政権の支配するスコットランド政府の政策によるものなのである。本格的に他の要因をコントロールした分析に先立つことになるが、この評価が（公平なものかどうかは措くとして）2011年選挙におけるSNPの躍進、政権維持に繋がったことは想像に難くない。この評価がどちらかといえば政党支持に起因する

表27 表26で「向上」と答えたもの

政党支持	いずれの政府の政策によるか				合計
	WM	スコットランド	双方の政策	その他	
Labour	6	44	10	2	62
	2.665	51.48	6.312	1.543	
	2.252	-2.729	1.67	.402	
Conservative	0	15	7	1	23
	.989	19.097	2.342	.572	
	-1.044	-2.338	3.299	.588	
LD	0	16	1	1	18
	.774	14.946	1.833	.448	
	-.918	.676	-.663	.853	
SNP	3	171	5	0	179
	7.695	148.627	18.224	4.455	
	-2.243	5.776	-4.237	-2.771	
支持無し	10	121	22	7	160
	6.878	132.851	16.29	3.982	
	1.524	-3.125	1.869	1.918	
Total	19	367	45	11	442

Pearson chi2(12) = 47.957 Pr = .000

likelihood-ratio chi2(12) = 53.308 Pr = .000

Source: /Users/tigerhorse/Dropbox/scotland/SES 2011/SES prepost 2011. dta

ものとも考えることもできるが、それはすなわち、政党支持と二つの政府の責任配分感覚に相関が生じているとも考えられよう。

反対に、この分野についてイシュー・オーナーシップを誇るウェストミンスターの（連立ではあるが）保守党政権が存在しているにもかかわらずこのような評価を受けては、スコットランド保守党にとってはいかにも都合が悪かろう。この項目については、さらに政党支持との関連をみてもみる。表27および表28である⁽¹³⁾。二大政党支持者は良いことはスコットランド政府の政策

(13) 本来三元表を出すべきところであるが、表示の都合上二つの表に分割した。

表28 表26で「低下」としたものの

政党支持	いずれの政府の政策によるか				合計
	WM	スコットランド	双方の政策	その他	
Labour	31	73	34	7	145
	28.605	58.197	47.84	10.357	
	.576	2.889	-2.816	-1.247	
Conservative	1	66	21	1	89
	17.558	35.721	29.364	6.357	
	-4.788	7.108	-2.047	-2.393	
LD	4	4	8	1	17
	3.354	6.823	5.609	1.214	
	.4	-1.418	1.252	-205	
SNP	32	14	22	5	73
	14.401	29.299	24.085	5.214	
	5.531	-3.903	-.555	-.104	
支持無し	48	79	109	28	264
	52.082	105.959	87.102	18.857	
	-.85	-4.56	3.861	2.943	
Total	116	236	194	42	588

Pearson chi2(12) = 106.386 Pr = .000

likelihood-ratio chi2(12) = 112.141 Pr = .000

Source: /Users/tigerhorse/Dropbox/scotland/SES 2011/SES prepost 2011. dta

表29 連合について：議会廃止か独立か

カテゴリ	N	平均	標準偏差
回答者自己位置	1,946	6.177	3.177
労働党	1,715	4.145	2.357
保守党	1,720	2.381	2.367
自由民主党	1,666	3.877	2.327
SNP	1,850	9.275	1.825

の結果ではなく、悪いことはスコットランドの政策の結果と捉えている。保守党支持者にとって、悪い評価はウェストミンスター政府のせいではない。

SNPは支持者はその逆である。そして、政党支持無し層はウェストミンスター政府のせいであるとはいわずとも、スコットランド政府だけの責任にはできないと考えている。分断は二大政党支持者と、SNPあるいは支持無し層とのあいだにある。2010年総選挙までウェストミンスター政府を掌握していたのが労働党政府であることを鑑みれば労働党支持者の回答がこのようになるのは致し方ないところもあるだろうが、かつてウェストミンスター議会のスコットランド議席を独占し、スコットランド出身の二人の首相を連続で出し、権限委譲後のスコットランド政府をも2007年まで支配していた労働党の支持者がこのようなウェストミンスター寄りの意識を持つようになってきているのは興味深い現象である。

3.2.6 環境

環境政策についての認識についても確認している。図4がそれである。ここでは回答者の意見分布、回答者が想定する各政党の意見についての認識の分布、それぞれに大きなズレがないことがわかる。よってこの政策領域についてはこれ以上の検討は行わない。

3.3 ナショナル・アイデンティティと政党支持

図6は政党支持ごとの連合に関する自己の考え方を問うたものである。この問題については、政党支持毎に大きな違いがみられる。分布は全体に「独

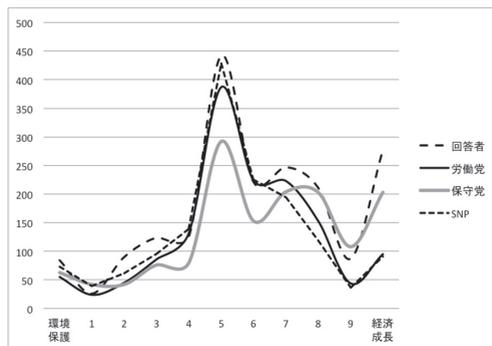


図4 環境か成長か：回答者自己位置および政党位置の認識

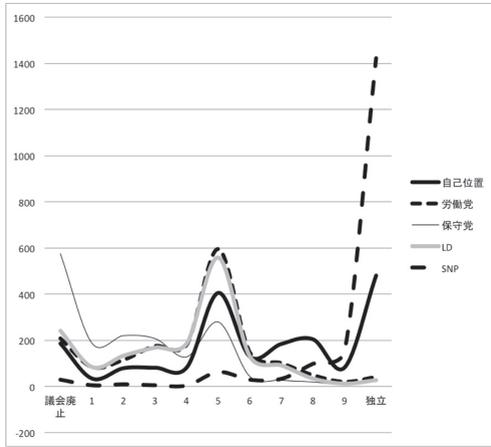


図5 連合について：議会廃止か独立か

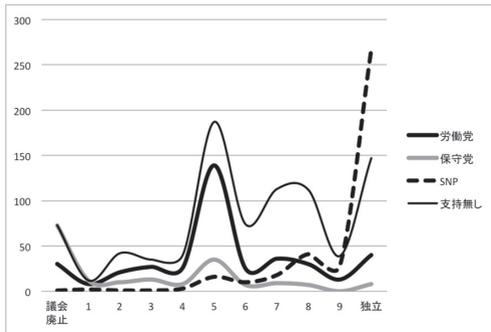


図6 連合について：政党支持との関係

立」寄りであるが、中間⁽¹⁴⁾も多くなっているため、二つの山があるとみるべきであろう。SNP 支持者や支持無し層には「独立」支持が非常に多い。「左右」とは異なり、SNP 支持者と労働党支持者の間には大きな違いが存在している。「支持無し」の曲線は、中道が厚い点で労働党支持者に近く、「独立」が厚い点で SNP に近いが、中道と独立のあいだが厚くなっており（独立に至

三二

(14) この解釈は難しい。現状維持だろうか？

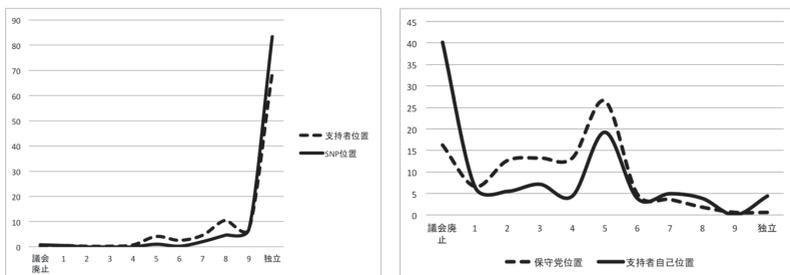


図7 連合について：SNP 支持との関係

らないスコットランド議会の権限強化?), SNP 支持者と労働党支持者の曲線の間のような形をしている。

さらに、特定の政党支持者の自己位置と、支持者達が考える支持政党の政策位置との関係を試みよう。図7左側は SNP 支持者について、右側は保守党支持者についてみたものである。労働党支持者については SNP と同様、2本の曲線にほとんど乖離がないので省略している。つまり、SNP 支持者・労働党支持者はある程度政党の主張に従っており⁽¹⁵⁾(相関係数はそれぞれ .282, .228) 総体としてはほぼ合致するのに対し、保守党支持者ではかなりのズレが存在しており(相関係数は .145)、全体としても合致しない。政党よりも moderate な考え方を持つ支持者がかなり存在しているのである。このことは、保守党支持者が他の要因をもとにその支持を固めているということを示唆させる。相関係数だと政党への近さがわかりにくくなるため、それぞれの政党支持者が考える政党位置と自己位置の差の絶対値をグラフ化したものが、図8である。要約は表30に示した。多重比較(scheffeの方法)での差の検定では、労働党支持者と保守党支持者との差が .700 ($p=.002$), 労働党支持者と SNP 支持者の差が -1.123 ($p.<..000$), 保守党支持者と SNP 支持者の差が -1.824 ($p.<..000$) と、いずれの差も有意である。

特に1999年の権限委譲以降、連合王国で実施される調査の多くでは、回答

(15) もちろん、ここでは因果関係は想定していない。

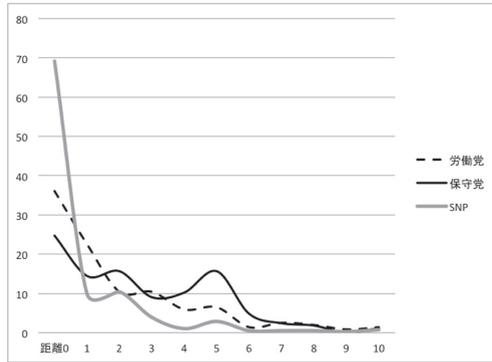


図 8 連合：回答者自己位置および政党位置の差

表 30 連合：回答者自己位置および政党位置の差

カテゴリ	N	平均	標準偏差
労働党	355	1.944	2.343
保守党	166	2.64	2.336
SNP	384	.820	1.689

者のナショナル・アイデンティティの割合や経年変化を調べるための項目が加えられている。SES2011では、「あなたは自分自身について以下のいずれの表現がもっともよくあてはまると感じますか(Which, if any, of the following best describes how you see yourself?)」がこれにあたる。所謂モレノ質問 (Moreno question) である (Moreno 1988 ; 2006)。自らを「スコットランド人」と自認している者の割合は 'Scottish not British' および 'More Scottish than British' を加えて58.45%ほどと考えることができる⁽¹⁶⁾。

これと政党支持をクロスしたのが、表32である。意味するところは一目瞭然に思われる。ここでも有意な調整済み残差を太字で示している。保守党支持者は 'British' を、そしてまた、二重アイデンティティ保持者 (dual

二〇

(16) 同種の調査では最新の30th British Social Attitudesの速報値では69%程度なので、やや少なめに出ているといえそうである。'Trend in national identity', <http://www.bsa-30.natcen.ac.uk/read-the-report/devolution/trends-in-nationalidentity.aspx>

表31 ナショナル・アイデンティティ：モレノ質問

	N.	%
Scottish not British	536	28.20
More Scottish than British	575	30.25
Equally Scottish and British	525	27.62
More British than Scottish	82	4.31
British not Scottish	183	9.63
計	1,901	100

Source: /Users/tigerhorse/Dropbox/scotland/SES 2011/SES prepost 2011.dta

表32 ナショナル・アイデンティティと政党支持

	S not B	S than B	equally S and B	B than S	B not S
Labour	70	119	147	17	38
	110.255	118.384	107.546	17.091	37.724
	-5.085	.076	5.022	-.025	.053
Conservative	17	25	79	15	35
	48.219	51.774	47.034	7.474	16.498
	-5.565	-4.674	5.742	2.953	5.027
LD	14	18	20	4	17
	20.585	22.102	20.079	3.191	7.043
	-1.747	-1.066	-.021	.473	4.026
SNP	209	124	39	2	3
	106.308	114.145	103.695	16.479	36.374
	13.149	1.236	-8.347	-4.08	-6.513
政党支持無し	219	282	231	44	88
	243.633	261.595	237.646	37.765	83.36
	-2.536	2.057	-.689	1.413	.728

Pearson chi2(16) = 319.747 Pr = .000

likelihood-ratio chi2(16) = 335.911 Pr = .000

Source: /Users/tigerhorse/Dropbox/scotland/SES 2011/SES prepost 2011.dta

identifier) をも多く含み、勿論 'Scottish' の割合は非常に少ない。労働党支持者には 'British' こそ多く含まれないものの、二重アイデンティティ保持者が多く、そして、長らくスコットランド政治地図において覇権を握って

きた割には ‘Scottish’ の割合が少ない。そして、強い ‘Scottish’ の支持の多くが SNP に向かっていることが分かる。政党支持なし層にはそこまで強い ‘Scottish’ アイデンティティの持ち主が多いわけではないが、‘More Scottish than British’ の割合は高く、全体として ‘Scottish’ の SNP 票に貢献している。この表だけでみれば、スコットランド・アイデンティティが投票結果を大きく左右しているように思われる。また、ナショナル・アイデンティティのあり方が政党支持、もっといえば、地域政党 SNP 支持と UK レベル政党の支持の違いで分断されていることが明らかになっている。

References

- Bowers, Paul, *Referendum on independence for Scotland*, SN/PC/06478, Parliament and Constitution Centre (<http://www.parliament.uk/briefing-papers/SN06478/referendum-on-independence-for-scotland>).
- Hassan, Gerry ed. (2007) *The Modern SNP : From Protest to Power*, Edinburgh : Edinburgh University Press.
- Hazell, Robert (2006) *The English Question*, Manchester University Press.
- Hazell, Robert and Ben Young eds. (2012) *The Politics of Coalition : How the Conservative-Liberal Democrat Government Works*, Hart Publishing.
- Lynch, Peter (2013) *SNP : The History of the Scottish National Party. 2nd edn.*, Cardiff : Welsh Academic Press.
- Moreno, Luis (1988) ‘Scotland and Catalonia: the path to home rule’, *Scottish Government Year-book 1988*, 166-181.
- Moreno, Luis (2006) ‘Scotland, Catalonia, Europeanization and the “Moreno Question”’, *Scottish Affairs*, 54.
- 成廣 孝 (2007) 「イギリスの選挙制度改革」, 『岡山大学法学会雑誌』, 第57巻, 192-234頁。
- (2010) 「マルチ・レヴェル状況におけるサブ・ナショナル・レヴェルの選挙：スコットランドの場合」, 岡山大学法学会編『法学と政治学の新たな展開：岡山大学60周年記念論文集』有斐閣, 397-419頁。
- (2014a) 「ヨーロッパの選挙制度」, 網谷龍介・伊藤 武・成廣孝編 (2014) 『ヨーロッパのデモクラシー：第二版』ナカニシヤ出版所収。
- (2014b) 「自由民主党：再生と転機」, 梅川正美・力久昌幸・阪野智一編 (2014) 『現代イギリス政治：第二版』成文堂所収。
- Sandford, Mark (2011), *Scottish Parliament Elections : 2011*, House of Commons RESEARCH PAPER. (<http://www.parliament.uk/briefing-papers/RP11-41/scottish-parliament-elections-2011>)

453 スコットランドにおけるマルチ・レヴェル状況の進行：2011年スコットランド地域議会選挙調査から(1)

富崎 隆 (2013), 「英国における2011年国民投票と選挙制度改革」, 『選挙研究』第29巻, 28-42頁.

Torrance, David (2010) *Salmond : Against The Odds*, Birlinn Ltd.

※参考文献は今回刊行した部分に関わるものに限る.